広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	つなぎ話み見られた連想の特徴
Author(s)	丹野, しげ子
Citation	児童の言語生態研究 , 1 : 32 - 36
Issue Date	1968-05-05
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045022
Right	
Relation	

■つなぎ話に見られた連想の特徴■

■丹野しげ子

対象—第三学年
使用教科書　日本書籍小学国語
　　"月の世界"（掲上）
教師の観察的観点
　つなぎ話をする時に，子どもはどんな連想をするか。
　　○その仕組み発展性と構造
得られた概観的項目
　奇想天外性
　一大事性—破壊と再現
　自らの限定性の反映であること
　主人公への集約性
　　○その時間的順進性について
　　○つなぐことへの関心（ゲーム的）の強さ
　　○カッコいい終了への期待
〔附録〕
　口述と筆記とにおける連想の異同・その結果

教材　月の世界（つづき話）

「あと十分で、月に着きます。どなた様も、うちゅうふくを着てください。…あと九分五十びょうです。」

という、ロケットのガイドさんの声がマイクから聞えてきた。

水も空気もない、月の世界。昼はものすごく暑く、夜は、ものすごく寒い、月の世界。地球を出発するときに聞いた話を思い出すと、なんだか、こわいような気もする。

ぼくたちは、急いで、うちゅうふくを着た。そして、空気のつまったボンベをせなかにつけた。（原まさる）

ふわっと、ロケットが止まりました。ドアが開きました。わたしたちは、われがちにかいだんをおりて、月の地面をふみしめました。「ばんざい」と言って、広行さんがとび上がりました。すると二メートルぐらい上がりました。

月では、からだの重さが、地球にいるときの六分の一になると聞いたことを思い出しました。（林　町子）

1、奇想天外性

予想として、次々と連想されてくるものが、月世界の冒険談として多分、アッといわせたり次はどうなるかという期待を持たせる話をするだろうと思いはしたが、それは予想を超えてはるかに奇抜であった。その一つとして、一つの事件が突如として持ち上がりまたあっけなく終わりをつげてそれがくりかえされていく。たとえば—ホテルが月に建てられる。ぶちこわされる。また建つ人が死ぬまた生きかえる。——のように。

また、一つに、月世界の事件でありながら連想されるものが天国であったり地獄であったり宝くじであったりしたことである。たくさんの美しく暖かな童話や物語・冒険物空想物など読む機会も多いだろうになぜこのように奇抜な感を受ける話が続けられてゆくのだろうか。

2、一大事性（生死）

人間にとって一大事であろうはずの〝生きる　死ぬ〟ということが何度も何度もくりかえされている。これは、あわやその瀬戸ぎわにということがなくほとんどストレートに死に向かう。ただ死んでしまうのではなく思いもかけぬ方法で必ず地球上へもどってくる。死から生への転換の際、時には、〝人生のやり直し〟などということばまで添えて。

2、破壊と再現

「生死」の問題が引き出されてくること。また、1で述べたようにホテルが建つ、こわされるがくり返されることなどがら、これらがつなぎ話をおもしろくする決め手のようなものと考えられ、話を進める際の一つの条件の様な位置を占めているように考えられる。すなわち、破壊することと再現することがつなぎ話のある一つの要素であると。

3、自らの世界への限定性

月の世界での出来ごとであるという意識は常にもちながらも、その世界でくりひろげられる物語の素材はなんと日常生活の中に見いだされる

ものが多いことか。生死、ボーイ、ホテル、月給、宝くじ、おみやげの紅白まんじゅうなど。また、子供たちが、空想したり、生活の遊びにはいっている、天国だとか怪獣だとか。両親や他の大人—大人の世界に住む人々—との接触、友人との間に強い関心を抱いて交換しあう知識、いわば生活の中でかいま見た秘密めいた世界のもの、遊びの中で盛んに用いられる話題を持ち出そうとしている。子供たちは月の世界を自らが住む世界に、自然におき換えてしまってその中で、知恵をしぼってその時々にあったものを取り出そうとするところに立って、初めて、話を構成しようとする意欲と満足を生むもののようである。

つなぎ話の素材が、子供たちの自らの世界を地盤として出てくるならば、連想の特徴の1としてあげた「奇想天外性」はどうなるのだろうか。子供自身がとっぴでもの珍しいなどと思いながら話しているのだろうか。大人にとっては、予想外だ、変なことをいい出したものだなどと思われても、実際にはそんなにとっぴなことを話しているつもりもなく真剣に取り組んでいるように思われる。

4、主人公への集約性

次々とつなげていく際に、一番最初には地球からの旅行者たちだから多分大勢が月に到着したと大多数納得のうえ、始められたのだが、すぐに主人公というかそれが一人にしぼられてしまい、同主人公が大体話の中心となってゆくのもおもしろい。

1、連想の時間的順進性

話を次々につないでゆくということは話がどんどん前進してゆくことと同じなのであるまいかというのは「月の世界」のつなぎ話において前にも少し述べたようにほとんどの話題がくりかえされてゆく。目だつものの一つに地球と月という二地点間の往来はひんぱんになされる。これは教科書の部分に、地球から月への旅行となっているからそれが子供の頭から抜けないのでもあろうが、宇宙の中の星で名前だけでも知ってるような金星や木星だといったようなもう一つ余分にいける場というものをつくらない。わき目もふらずいっさんに月と地球を往き来する。またこの必ず月に話をかえすということホテルを建て直す土地を選ぶさい、初めてロケットが着陸した場に決めるなど最初の印象—月世界へきた—が常にまつわりつき、話がどこか不定の地のできごとのごとく感じられても決して月を忘れてはいないといえよう。子供たちにとっては、何度同じ話題がくりかえされようとも、そのたびごとに、頭の中で話がゆきつもどりつするわけではなくて常に話は前に進んでいると言える。話された事件は、どんどん時間の中にすいこまれてゆく。「月の世界」のつなぎ話では、時間的に後もどりするという例は一つも出てきていない。

2、つなぐことへの関心(ゲーム的)の強さ

つなぎ話の最中、ホテルがこわされたり、人があっさり死ぬ目に会わされた時、ある子供たちはヒャーと言って喜び、違う子たちは、「いいかげんにしろよ」と言い、いやがったりしたのはなぜだろう。自分の頭の中に描きつみ上げられてきたものの上に立った予想というか発展させようと思っていたものが打ちくだかれてしまいまた新たにつみ上げなければならないためではなかろうか。破壊を試みる子供も、それに対して再現を図る子供も、自らの描いてきたものへぴったりとつないでゆきたいのだろう。子供たちがうまく話をつなげたという時、それは前の人の話にうまい具合につなげたということではなく自分の描いてきた像にもうまくつなげたということのようだ。自分の像と話されているものとがうまくいかないような時、いやだなあと思ったり、そこをなんとかてっとりばやく消してしまうことはできないだろうかと考え、そこで「先生それは嘘だって言ってよー」の声がしたり「彼の言ったことは嘘で」と言ってから自分の話をつなげようとしたりする。自分の像につなごうとしていくわけであるから、1にもどるが、やはり連想は前にのみ進み、話されたことはすべて過去になり今話されているのが一番新しい事件となる。

1、カッコイイ終了への期待

連想が前にと進む時、つなぎ話の終わりはどう受けとめられてゆくのだろう。いつまでも延々と話が続きそうで、子供たちは「もう終わりにしよう」という。その場合、死というものが一つのピリオドに用いられたが—それでも満足できない子供は「モットカッコイイオワリ」を欲求する。

以下当時の採録を掲げる。

■ 口述によるつなぎ話 ■

A(男)「あのね、ロケットの……あのそしてね、ロケットのよびのさんそボンベをとってきてね、そしてね、流れ星が落ちてきてね、ロケットにぶつかって爆発してね、そしてね、あのね、あの人間はね、探検しながらね、あのね、いつね、酸素ボンベの空気がなくなるかってね、心配しながらいた。」

B(男)「エートね、また、ロケットにね、鉄やいろんな物積んでね、またね、月にホテル作ったんだよね、それでね、地球に連絡してね、えーと地球から月に、また、ホテルができたからきてくださいったらある人がきたんだよね、その人がとまりにきてね、宝くじを引いたのね、あたった番号はへのクサイヨ(イチヨン)でエート、への93(キユーサン)14というのよね、そのくじは一枚もはいってないからね、その人何枚引いてもあたらなかったからね、がっかりした。」

C(男)「がっかりしたけどね、一度は首つりをして死のうかと思ったけどそのロケットにのってきた人間に止められてね、そのホテルのボーイにやとわれたの。」

D(男)「ボーイにやとわれたけどボーナスはくれないし、月給は少ないしやめようと思ったけど『お願いです月給は値上がりしますから。』と言いましたけど、えーと出ていってしまいました。」

E(男)「だけどね、ホテルの主任さんがもう一度きてくれっていってね。初めての月給をもらったんだってね、それでおまんじゅうを買おうと思った、それを落としちゃったんだって。」

C(男)「でもまた月給を減らされたから、首つりをして死んじゃったけどその人は生きてる間に悪いことをしたから、地獄のえんま様にされったんだってね、それでおまんじゅうを買おうと思った、それを落としちゃったんだって。」

C(男)「でもまた月給を減らされたから、首つりをして死んじゃったけどその人は生きてる間に悪いことをしたから、地獄のえんま様にさんざんいためつけられた。」

F(男)「だけどね、えんま様は帳面を見たら、もう少し長かったから、また地球に帰れることになったの。」

G(男)「ええとそれであの人はやっぱり月がすぎなので、月にいってホテルにとまりました。だけどその人はやっぱしいやだと思ったんですけどいきたくてたまりませんでした。だからええと、だからボーイに頼まれたんだけど月給はたったの三円でした。だからまた、どんどんためようと思ったんですけど全然たまらないので、うーんと一生かかって三十円しかもらえませんでした。だけどもまた生きる薬を買ったので、あれはたったの三十円でした。だから財産がなくなってしまってやっと生きかえってまた働いていました。それでどんどん働いているうちお金が三十万となってホテルの主人が『やとってくれー』と頼んでました。だけどいやだいやだといったのでそのおやじは死のうと思いましたが死にたくありませんでした。」

A(男)「そこにはね、たこ入道がいてね、そしてね、そのホテルをぶっこわしちゃったのね。そしてね、また探検に歩いていってね、そしてね、うーん男の子が死んでたの。」

声(流しちゃえ　つづける　おわりにする)

B(男)「またね、ホテルを建て直してね、今度は地球へ連絡して、今度はえーと一泊千円で、二泊になると二泊で千五百円でするからって地球へゆったから千人くらいお客がきました。その月のホテルに来ました。」

H(男)「あんまりはいりすぎたのでホテルが、つぶれてしまいました。」

I(女)「あのね、つぶれちゃったのでみんなが帰ってってホテルがパーになってしまいました。それでまた建て直したが一人のお客もきませんでした。」

J(女)「おかげでホテルはつぶれませんでした。」

声(その方がいいぞ——)

K(女)「うーんとねー、だけどお客さんが一人もこなかったからね、そこ運が悪い土地だと思ってちがう土地に建てたの。」

声(あの、またつぶされるからやめろよ)

L(女)「あのね、そしたらね、今度はね、たこ入道とか変な怪じゅうばかりきて困っちゃった。」

G(男)「それであんまりたこ入道みたいのがいるからロケットのあった所にホテルを建て直しました。そしたら今度は人間がこないでオバケが出てきてまた困ったので引き返してしまいました。今度はたくさん人間が出てきましたが……ホテルに泊まれましたがうんとボーイ不足で、うー

ん、あの主人がボーイをやってて『こら早く弁当持ってこい』『はいはいヘッヘェ』『ややややおふろわいてねえぞ、ややややごはんはまだか』そんなことばっかし言って主人はぶっ倒れてしまいました。そしたらお客の人から水をかけられて……目をさましたが、その後はお客が全然いないで、お金も全部とられてしまいました。それからまたショボショボといきましたがまたお客がきてそれはすごいデブで百貫デブでした。それであんまり広い所がなかったので……大広間に泊まらせました。その辺で『めしもってこい』と言ったんだけどブタめしもってこい、ブタの丸焼きはない。ブタがないので困ってしまいました。それであの人がブタに似ていたので、ブタひきにしようと思ったけど、食べる人がないので、かわりにブタの形をした（えーと）おかずを作って食べさしましたが、『これはブタじゃねえぞ』と言って『そうブタブタいわねえでくれ』と言いました。だけどもしようがなくて違うのを作ってみたけどやっぱしブタじゃないので怒ってあの主人をブタの形にしてしまいました。それで自分も食べようと思ったけど食べんのをよして、『食べたくねえや』と言って急いで帰ってしまいました。それでショボショボとえんえん泣いていましたが泣いてもお客さんがこなかったのでとうとう思い切り泣いてしまいました。そしたらドラネコがきて泊めてくれとニャンニャン泣いていました。のらねこでもお客さんに変わりがないからお客にして一番上等の室にしてしまいました。のら猫にペコ〳〵さげましたがニャー〳〵ばっかし言ってるので追い払ってしまいました。」

（途中で、もっとマジメにやれよ、長すぎるぞ、もうやめろの声しきり）

M（女）「ホテルの主人はあんまり疲れたので、外を散歩することにしました。すると大きな、洞くつがありました。」

N（男）「また、宇宙グマがいておなかがすいていたので、ぶっころして食べてしまいました。」

声（エエッまた、そんなのやめろよー先生、それは嘘だって言ってよー）

E（男）「そして天国にいってそしてまた人生のやり直しをしようと言ってまた地上に帰っていってそれから神様がおみやげに紅白まんじゅうをくれました。それからそのおまんじゅうを売ってボーイを三人つれてきてホテルを経営したんだけどそれもぶっつぶれてしまいました。（月にかえったの？）月。それで終わり。」

声（オワリにしようよー もっとカッコよくおわろうよー）

I（女）「それでもまた苦労してホテルを建てても一人もお客がこないのでまた月全体に大きなホテルを建ててしまいました。そうしたら人間が人間といってもまだできそこないで全然もってきませんでした。」

声（カッコよくおわろうよ、H君にあてたらだめだよ、またこわしちゃうって言ってるよ）

H（男）「それからね、三日たったら水星がとんできました。ハレー水星でね、月にぶつかって爆発してしまいました。それで終わり。」

声（だめだよ）

H（男）「それでまた天国にいってまた生きかえりました。赤ん坊で生きかえったので、大人になったらこじきを始めました。」

B（男）「寺（O君のこと）の言ったことは嘘で、えーと爆発したらホテルにその主人はいたので月だけ爆発したらさ、ホテルは空気がないから浮かんで、そのまま死んじゃった。」

附録

一、口述と筆記とにおけるつなぎ話の連想の異同・その結果

○最初の話の印象の差異がのちくの連想を制約する。

○初印象の明確化を図ることのために連想する。

筆記のつなぎ話の場合に、最初に示した例文は

「むかしむかし、日本のきたぐにの山に、そこなしのふかいほらあながありました。というのは、このほらあなは、まほうのほらあなであったからです。山のふもとの人たちが、このほらあなのいり口に立ってねがいごとすると、きっと、ねがいが、ききとどけられました。」

であったが、子供たちが強く印象を受けたのは、そこなしのほらあな、まほうのほらあなというところで、どのグループのつなぎ話の中にも印象の後がずっと尾を引いてゆく。そこなしから探検へと結びつき、不思議な事件・恐怖と動くし、まほうからねがいごと、幸・不幸にいくといったように。

「まほうのほらあな」の場合はつなぎ話の話題が、先の「月の世界」の時とは違って予想していたほうへと向いていったようだが、すなわち、先に奇抜だと感じたようなものは出てきていない。これは単に口述と筆記による差違ではなく、強く印象づけられたものによって連想がある範囲に限定されていくためと思われる。

「月の世界」の話においては月と地球の二地間に印象が向けられていったために、その往復がくりかえされながら連想が前進して行って他の地点に寄り道しないが、月における出来事に対しては「月の世界」という限定はあまり受けていないように思われる。

それと同様に「まほうのほらあな」の話では、まほうやそこなしのほらあなということに対してひきずられてゆくために、この時までに築かれきたまほうだとかふかいほらあなに対する意識だとか感情・見方といったものに、まず連想の範囲に対して自らが制限を加えていってしまい、その他の面においては何を持ち出しても平気だが、ことこの面においてはこうなるべきだと無意識の内にも考えてしまっている。どの話においても次々につなげていく際に常に自由でどこにでもすぐ拡がってゆく連想がなされるわけではなく、最初の話によって受けた印象の差違によって次の連想というものが限定を受ける点、限定されない点が違ってくるのではなかろうか。いかに目まぐるしく話がかわってゆこうとも、とんでもないものが出てこようとも、逆に動きのとまったようなつなぎ話でも奇抜さを許された面だからその話ができる。まためちゃな動きを許さない面だと思うから自らに制限を与えてしまっているというように。

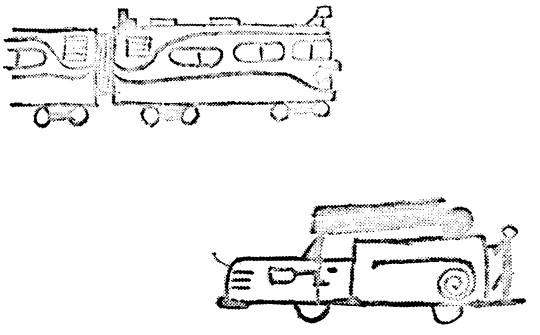
■ 連想の明確性 ■

また、これは口述と筆記との差違なのか、それとも最初の話の差違なのか、それとも連想そのものの性質のようなのかははっきりしないけれども、子供たちが話をつなげていく際に、その時々の場面をはっきりさせていこうとしているように思える。たとえば

「ほらあなにはいったら八本の道があり……左から三ばん目の道をえらんだ」

とか、たんけんして

「三か月もたったけどおわりはありませんでした。三十人のうちつぎつぎ死んでもう十人に……」

眼前に八本の道が浮かぶ、どれを選ぼうか、こんなに歩き続けたのにまだ道は続いているが、人はどんどん死んでゆく。一つの場面を的確にしながら、そのうえで次の場面へと移り変わってゆくことができる。連想を階段のようなものにたとえるなら、やはり、一段ずつふんでゆくのであって、急に二、三段ふみとばすといったようなものはあまり見られないような気がする。いま出した例は二つとも一人の話で、前につなげているものではないが、前のつなぎ話に話をつなげようとする時に何を考えるのだろうか。ほらあなの中で手りゅうだんをこうもりに向かってなげつけ、ドカーンということばで終わると、「でも五十メートルはずれた」とつなぐ。また、ほらあなで何ものかに追われて入り口に向かって逃げると、入り口は突然しまるという話には「よこの石が動いているのを見つけた。石がくずれてあながつづいていた」として話が進むことができるようにもっていこうとする。爆発でせっかくのほらあながこわれては大変と、でも五十メートルも離れた。広いんだよ。今までいわば道が直線的につづいてきていたものを縦の方向がたたれた時、横の広がりというものに目を向けていこうとする。いわば今まで話が進んできた方向というものを変えようとする考え方、いくつかの条件を出していくなどしていく中にこの話をどう続けていくのか、ここまで窮地に追い込まれてきたが、どうすれば切り抜けられるだろうかというような思考が見いだされるように思う。そしてこの思考はやはりひとっとびに移っていくのでなくて一つ一つの状態をふんで進んでいくように思われる。

（町田第五小学校教諭）